01

創刊号

本願寺教学伝道研究所
ニューズレター『あなかしこ』

あなかしこ

ANAKASHICO

特集 「宇宙」への入口

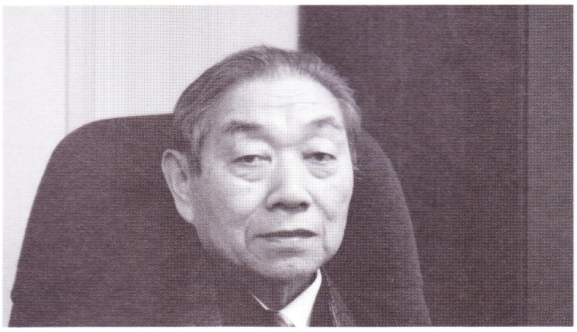
書評 『納棺夫日記』を読む

論点 おくりびと

題字／親鸞聖人真蹟『大御前宛書状』（本願寺所蔵）より
写真提供／国立天文台

創刊にあたって

教学伝道研究センター　所長　浅井 成海



「教学伝道研究所」とはどんな所ですかと何人かの方に質問をうけたことがあります。

現代の厳しい時代に、親鸞聖人の深いみ教えを一人でも多くの方に伝えていくために、また生きる力としていただくために、さまざまな研究や出版物を発刊しています。

心の悩みについての電話相談や教学と仏事についての電話相談もあります。『原典版聖典』『註釈版聖典』や「現代語版聖典」の発刊、お聖教にどう親しむことが出来るかを学ぶ『季刊せいてん』、また次つぎと生ずる現代の課題をみ教えに聞くことによってどう乗り越えていくことが出来るかなど、それぞれの問題にスタッフが熱心にとりくんでいます。

このたび発刊されるニューズレターは、わかりやすく、親しみやすく、教学伝道研究所をみなさんに知っていただくためのものです。

是非、お読みいただき、法務の参考としてください。

教学伝道研究所の意義

教学伝道研究所　所長　満井 秀城

総合研究部門は、直面する現代の諸課題に迅速かつ正確に対処することを目的としています。自死（自殺）、生命倫理、過疎と寺院の活性化等の問題に、きちんとした学術的姿勢で臨むよう心がけています。

聖典編纂部門は、百年・二百年先に残る仕事として、地道な作業を重ねています。これまでも、『原典版聖典』・『註釈版聖典』・「現代語版聖典」が刊行されましたが、親鸞聖人750回大遠忌に向けて『浄土真宗聖典全書』六巻の編纂にかかっています。

また東京支所は、膨大な情報が集中し発信される首都圏に拠点を置き、情報収集を大きな柱としています。例えば、全国紙四紙に掲載された、宗教に関わりのある記事を紹介するメールマガジンや、話題の新刊仏教書を紹介する仏教書レビューなどを、いずれもインターネットで配信しています。

相手を見ないと処方箋は書けません。教学伝道研究所では、直面する状況を正しく把握し、動きとなる教学を目指して努力しています。

連載 先學にきく

京都学派（哲学）の流れを汲む、元研究所所長の石田慶和先生に、真宗との出会い、学問と信仰との関係についてお話いただいた。

聞き手／葛野 洋明（教学伝道研究センター 常任研究員）

本当に自分の愚かさを知ることができるのは、浄土真宗しかないという気がします。

石田 慶和
1928年京都府生まれ。
京都大学文学部哲学科卒業。文学博士。
龍谷大学名誉教授。前仁愛大学学長。
元浄土真宗本願寺派 教学研究所 所長。
『信楽の論理』『親鸞の思想』
『宗教と科学・ニヒリズム』『歎異抄講話』
『念仏の信心―今なぜ浄土真宗か』
『浄土の慈悲』『教行信証の思想』など

―先生の哲学や浄土真宗との出会いについてお聞かせ下さい。

僕は海軍兵学校におりましてね。そこでは死を前にしておるわけですから、当然、精神教育をされると思っていたんです。ところが全然そうではなかった。

そんな時に兄貴が一生懸命に私を引っ張り出して、親鸞聖人の教えに会わせてくれたんですよ。兄貴の言葉を通して真実というものが開顕した。「自分自身を考えてみろ」と言われたんだけどよくわからなくて、一生懸命考えたんですけどなかなか捉えられなくて。

終戦になり価値観が大きく転換した時、親鸞聖人の「よろづのこと、みなもてそらごとたはごと、まことあることなきに」という言葉にジーンときましてね。それは自分達が経験していることでもあった。初めて本気になって親鸞聖人の教えを聞くようになったんです。親鸞聖人の言葉によって自分自身のことが、罪業深重ということが初めてわかったということになるんでしょうか。

それで『教行信証の哲学』を著わされた武内義範先生に学ぼうと、京大で哲学を学び始めたんです。

―学問とご自身の信仰とはどのような関係にあるのでしょうか？

年をとるにしたがって、学問よりも信だ、信でないと分からないということが、良く分かってきました。信というのは、自分の愚かさを本当に知る、自分の愚かさが本当に分かってくるということだから。浄土真宗は、そういう自分の愚かさを本当に知るということが一番中心じゃないですか。仏教の中で本当に自分の愚かさを知ることができるのは浄土真宗しかないという気がしますね。

―哲学では合理的・科学的な考え方が大切なのでは？

科学的と宗教的とどっちをとるかと言われると、私も科学的世界観をとるんです。しかし、この二つは違うということをはっきりしとかなければいかんと僕は思うんだ。世界の果ての百三十七億光年というのを一体だれが経験するのかということになると、科学的世界観の持っている問題点がはっきりする。

―科学的と聞くと、つい、正しい、本当だと思い込んでしまいますね。

思い込むのは誰も教えないんだけれども、自然にそういう風になってしまうんです。それが凡夫の浅知恵でしょ。誰もそういうことは言わないんだけれども、それを信じたくなる。だから浄土真宗の実践というのは、そういう自分の愚かさを知る智慧を与えられるということしかないんじゃないですかね。

―浄土真宗の核心に触れる言葉を聞けて本当に嬉しいです

自分で最近そう思うんだから、しかたがないから、そう言っているだけのこと。僕の智慧で言っているわけではないんですよ。それが宗教というものでしょうね。自分の智慧ではどうしても見極めきれない世界に触れるということが。

自分の智慧ではやっぱりはかろうとするんですよ。けど実際にははかり切れない世界があるんじゃないでしょうか。それを本当に開くのが宗教的な世界じゃないですか。

編集／竹本 了悟（教学伝道研究センター 研究員）

特★集

「宇宙」への入口

三千大千世界、極楽浄土…お聖教のなかには、仏教独自の宇宙観が説かれています。インドから日本に至るまで、仏教は私たちをとりまく世界に対し、常に関心の目を向けてきました。近年、宇宙のさまざまな謎が、最新の天文学によって明らかになりつつあります。本願寺派の僧侶であり、二〇〇六年より国立天文台長を務めておられる観山正見先生に、宇宙観についてお話をうかがいました。

観山 正見

1951年 広島県生まれ
1975年 京都大学理学部卒業
1981年 京都大学大学院理学研究科博士課程修了 理学博士
1992年 国立天文台教授
《現 在》国立天文台 台長

著 書
『太陽系外の惑星に生命をさがせ』(光文社)
『シミュレーション物理学』(共著・朝倉書店)
他多数

渦巻銀河[NGC2403]／国立天文台提供

国立天文台、宇宙の謎

観山 正見

国立天文台の仕事

私は、本部が三鷹(みたか)にある国立天文台に勤めております。天文学といいますと、皆さまの暮らしとは殆ど関係ないとお思いでしょうが、仏教で大切な日であるお彼岸、則ち、春分や秋分の日は、国立天文台が決めています。つまり、独立国として、暦(こよみ)や中央標準時を決めることは重要ですが、それらは国立天文台の仕事なのです。立春とかの二十四節季(にじゅうしせっき)も決めています。少し身近に感じられるようになったかと思います。

市民に開かれた天文台

三鷹の構内には、市民の方々に天体観測を楽しんでいただくための「社会教育用望遠鏡」、宇宙の旅が直感的に体感できる「四次元デジタル宇宙シアター」、歴史ある望遠鏡を展示してある「天文歴史館」などがあり、現代天文学の成果と共に様々な天文学の歴史にふれていただく施設があります。また、今年の7月からは、天文台の旧台長官舎を改築して、三鷹市が運営する「星と森と絵本の家」がオープンします。国立天文台の施設は、毎日(土日も含めて)公開(無料)していますので、訪問して下さい。構内は、約九万坪の敷地があり、自然が豊富にあります。自然を楽しむため散歩する方も多くいらっしゃいます。

日本各地の観測施設

国立天文台の研究施設は、天文観測に環境のよい場所に置かれています。国内では、長野県野辺山(のべやま)に45mの電波望遠鏡や太陽を観測する電波望遠鏡があります。乗鞍(のりくら)山の山頂近くには、太陽のまわりのコロナを観測する望遠鏡が、岡山には188cmの口径の望遠鏡があります。さらに、岩手県水沢(みずさわ)、東京都父島(ちちじま)、鹿児島県入来(いりき)、沖縄県石垣島(いしがきじま)に20mの電波望遠鏡が設置されており、これらのデータを結合して2300kmに相当する望遠鏡があります。この様に、日本の各地に観測装置があります。

世界最大級のすばる望遠鏡

国立天文台の施設で、いま、脚光を浴びているのは、なんと言ってもハワイのすばる望遠鏡でしょう。ハワイには、富士山より高い4200mのマウナケア山があり、その山頂近くは、大気の状態が極めてよく、晴天の割合が高いですので、世界各国が望遠鏡を建設しています。日本は、口径8・2mの望遠鏡の建設に九年の歳月をかけて1999年に完了しました。一枚鏡としては、世

界最大級であり、その成果は世界的に注目されています。特に、宇宙の最遠の天体は、128億光年彼方（かなた）にありますが（宇宙の果ては137億光年）、その天体を見つけたのはすばる望遠鏡です。最遠の天体から二十番目までも全てすばる望遠鏡が発見したほどです。この望遠鏡は、一般の方にも日時は指定されていますが公開しています。興味ある方は、国立天文台のすばるのホームページを見て下さい。

チリに新しい望遠鏡

天文観測の適地の条件は、大気の影響がなるべく少ない高地で、水蒸気の量も少ない場所です。その結果、南米のチリ北部の5000mの砂漠を新たな望遠鏡のサイトと決めました。そこでは、欧米と協力してアルマ望遠鏡を建設しています。60台を超える電波望遠鏡を建設して、それを18kmに展開したり（山手線の大きさに匹敵）、500mに集合させたりして、ハッブル望遠鏡やすばる望遠鏡より十倍解像力の良い電波望遠鏡となります。完成までには、また数年必要ですが、完成の暁には、大きな発見を期待しています。特に、太陽系外の惑星が生まれる現場が観測できると期待されています。

太陽系外の惑星観測

さて、天文学の最近の話題は、一つは太陽系外の惑星の発見でしょう。太陽系外の惑星の確実な直接像はまだですが、間接的に惑星の存在が、すでに三百個以上確認されています。今後は、直接の写真撮影に成功したいと、すばる望遠鏡はじめ、世界の望遠鏡が競争をしています。ハワイの別の望遠鏡が、昨年、太陽系外の惑星の写真を撮ったと発表しましたが、まだ確実なものではありません。今後も競争が続くでしょう。

生命誕生の謎は望遠鏡で明らかになる

天文学者は、その先のことまで考え始めています。地球のような生命を育んだ惑星の探査です。現在、直接撮影を競争している対象は、木星のような大型のガス惑星です。地球のような小型で岩石質の惑星は、現在の望遠鏡では到底観測できません。しかし、あと20～30年すれば、技術の進歩によって地球型の惑星も観測可能と思われます。直接観測が可能となれば、その惑星の大気の情報がわかります。我々の地球もそうですが、大気には水蒸気やオゾンが存在しています。それらは、海の存在や植物の存在の証しです。同じことから、太陽系外の惑星に海があるのか？植物がいるのか？動物がいるのか？が調べられることになります。地球型の惑星がどんどん見つかれば、いろんな発展段階の惑星が見つかり、それらを比較することもできましょう。生命誕生の謎も明らかにすることができるかも知れません。「生命誕生の謎は、顕微鏡でなく、望遠鏡で明らかになる」が最近のキャッチフレーズです。

宇宙の見えない物質

もう一つの話題は、宇宙が、見えない謎の物質に占められていることです。すばる望遠鏡で、128億光年も見通して、多くのことがわかったと思っていましたら、星や銀河という普通の物質は、宇宙を構成する4％程度に過ぎないとわかってきました。残りの21％程度はダークマター（暗黒物質）という、重力は及ぼすが、望遠鏡には見えない物質で占められていました。見えないのにその存在がどうしてわかるかといいますと、重力という力を及ぼすため、その存在が認められたのです。

一方、残りの75％は、ダークエネルギーと呼ばれる物質で、これもその力により存在が必要とわかったのです。しかし、奇妙なことに、この力は、反発力（斥力（せきりょく））だったのです。この力によって、宇宙の膨張をどんどん加速していると思われています。ダークマターもダークエネルギーもその実体はまだ不明で、多くの研究者が調べています。

今年は「世界天文年」

この様に、宇宙は、多くの謎が秘められている世界です。今年、2009年は、ガリレオが宇宙を望遠鏡でのぞいてから400年で、「世界天文年」の年であります。これを機会に、多くの皆さんが、宇宙に興味を持っていただければと思います。

この内容は、教学伝道研究所・東京支所が二〇〇八年八月に開催した「首都圏研究者懇話会」第一回例会における講演を要約いただいたものです。なお、二〇〇八年一二月九日に開催された教学シンポジウム「親鸞聖人の世界　浄土」では、観山先生より天文学に基づいた宇宙観についてお話をいただいた他、哲学や真宗学の立場から「浄土」についてパネルディスカッションを行いました。その内容は教学伝道研究センターブックレット『親鸞聖人の世界　浄土』（二〇〇九年刊行予定）に掲載する予定です。

書評

仏教書レビュー

教学伝道研究センターの研究員が、仏教に関する読みやすい書籍を紹介いたします。

青木 新門 著

納棺夫日記 増補改訂版

文藝春秋（文春文庫） 490円

【目 次】

・序文 美しい姿（吉村 昭）
・納棺夫日記
　第一章 みぞれの季節
　第二章 人の死いろいろ
　第三章 ひかりといのち
・著者注釈
・『納棺夫日記』を著して
・あとがき
・文庫版のためのあとがき
・光の溢れる書『納棺夫日記』に
・覚える喜び（高 史明）

先日書店へ行くと、本書がレジカウンター脇に平積みにされているのがふと目に入ってきた。平積みの理由が、映画「おくりびと」の米アカデミー賞外国語映画賞の受賞によるものであることは、今さら言うまでもないであろう。私もまた、連日の受賞報道により本書を手にしたのである。

しかし、本書の内容はマスコミの報道によって予想していたものとは、いささか異なっていた。前半は納棺夫となった著者の日常を綴るのが主であるが、それはいわば本書の導入部分であり、読み進むにつれ、納棺夫としての経験をベースとした生と死に対する作者の思索が存分に展開されていく。

私は映画「おくりびと」を見ていないが、著者は本書が映画の原作として扱われることを辞退されたのだという。『毎日新聞』には、それについての著者の思いが、以下のように紹介されていた。

送られてきたシナリオを見るとね、親を思ったり、家族を思ったり、人間の死の尊厳について描かれているのは、伝わってきて、すばらしいんです。ただ、最後がヒューマニズム、人間中心主義で終わっている。私が強調した宗教とか永遠が描かれていない。着地点が違うから、では原作という文字をタイトルからはずしてくれって、身を引いたんです。

（2009年3月2日 東京朝刊）

映画の制作者サイドの方が、本書を熟読されたであろうことは想像に難くない。しかし、映画には本書のテーマであるところの、死とは何か、死を受け入れるところに見えてくる宗教的な世界は扱われなかったようである。逆に言えば、それだけ死そのものを見つめることが、一般に受け入れられがたいことを意味しているようにも思える。本書には、こんな印象深い一節がある。

毎日毎日、死者ばかり見ていると、死者は静かで美しく見えてくる。それに反して、死を恐れ、恐る恐る覗き込む生者たちの醜悪さばかりが気になるようになってきた。（71ページ）

このように本書には、人間中心主義のはらむ、都合の悪いものは見ないようにする不誠実さ、人知で捉えられないものは捨象しようとする傲慢さに対する、敏感な批判的視線が流れている。生に絶対の価値を置く現代の風潮は、誰もが必ず死ぬという事実の前で、実は自らを孤立させ、本当の幸せを損なっていることに他ならないというメッセージが、著者の身近な体験を通して語られている。

その上で、親鸞聖人の思想に強く共鳴する著者は、生死を超えた光との出会いという、自らの宗教的な世界を披瀝している。「ただ自分が納得できるまで書き進んだだけ」という本書は、ある意味、読者を置き去りにするほどの勢いでもって、著者の出会った感動を伝えている生きた宗教書である。また、こうした著者の真摯な姿勢は、俗信に根ざした葬儀のあり方や、死に携わりながら死から目をそらす僧侶への手厳しい批判ともなっている。それでいて嫌みがないのは率直で真面目な著者の人徳であろうか。浄土真宗を学ぶ僧侶の一人として、襟を正される思いのする一冊である。

評者／高田 文英（龍谷大学 講師）

新刊紹介

四国遍路の寺 上・下
著者／五来 重
角川学芸出版（角川ソフィア文庫） 860円

ビギナーズ日本の思想 道元『典座教訓』
著者／藤井 宗哲
角川学芸出版（角川ソフィア文庫） 630円

またいつかあいましょう 備後の一住職の置きみやげ
著者／福間 欣嗣
自照社出版 1680円

親鸞浄土教と師弟像
著者／川添 泰信
自照社出版 2520円

『成唯識論』を読む
著者／竹村 牧男
春秋社 7875円

法然上人とその弟子西山上人
著者／ひろさちや
春秋社 1575円

念仏ひとつ手ぶらで帰る
著書／千葉 乗隆
探究社 1575円

風はどこから お育て
著書／村上 のぶや・村上 慈顕
探究社 735円

お寺は何のためにあるのですか？
著書／撫尾巨 津子
法蔵館 1050円

増補新版 念仏の雄叫び
著書／増井 悟朗
法蔵館 1260円

いのちの音がきこえる 鈴木章子さんの四十七年
著者／中川 真昭
本願寺出版社 1260円

がばいばあちゃん お寺へ行こう
著者／島田 洋七
本願寺出版社 735円

書籍紹介

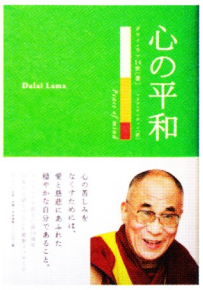
竹内 整一 著

日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか

筑摩書房（ちくま新書）　756円

著者は倫理学・日本思想史を専門とする東京大学教授・竹内整一氏である。

著者によれば、「さようなら」という別れの言葉の語源は、「然らば」「さようであるならば」という接続詞であり、現代的には「そうであるならば…」「～ということであるならば…」という意味になる。「さようなら」という言葉は、別れ際に、それに先行することがらを確認・総括したうえで、それと訣別し、新しい「こと」へと移行するための確認だと著者は指摘する（28ページ）。「別れ」を語ることが、第8章の「死」という別れに収斂していく。その思索は仏教思想にも注目しながら、古典や中世の文献から現代日本人の死生観・無常観までを駆けめぐっていく。愛別離苦に寄り添ってきた僧侶にとっては大きな示唆が与えられる書物であろう。



ダライ・ラマ14世 著／**マリア・リンチェン** 訳

心の平和

サンマーク出版　1,260円

本書はダライ・ラマ法王14世が、2008年秋に日本で行った3つの講演と、若者との質疑応答をまとめたものである。「本当の世界平和は、心の中に育まれたひとりひとりの「心の平和」によって、築かれるべきもの」（41ページ）であるといわれるダライ・ラマ法王の思いのもと、ひとりひとりが「やさしさと思いやり」のこころを育てていくことの必要性を、全編にわたり平易な語り口で綴られている。

本書の中、「現代を生きる君たちへ」は筑紫女学園の学生を対象に行われた講演であるが、そこでは利他の心にもとづく「すぐれた心がまえ」の実践こそ、自他ともに幸せな関係を築いていくことが出来ると説かれている。なお、本書では最後に「付記」として、現在のチベット問題の一部についても記されている。

井上 鋭夫 著

本願寺

講談社（講談社学術文庫）　1,102円

本書は、戦後の一向一揆研究を代表する名著『一向一揆の研究』（吉川弘文館／1968年）の著者・井上鋭夫氏による本願寺の通史である。

親鸞聖人の生涯と思想、関東における初期教団の実態、寺院としての本願寺の形成過程、教団の発展過程などを論じながら「十三世紀初頭から十九世紀までの七百年に及ぶ寺史と教団史を描く」（解説）本書の特徴は、本願寺の発展過程を「その発展の背景をなす日本の社会・政治・経済・思想と関連させつつ叙述」（はしがき）しようという著者の姿勢にある。

本書は著者による『本願寺』増補版（至文堂／1966年）の文庫化であるが、今日においても重視されている話題が随所に見られ、その価値はいっこうに色褪せていない。

飛鳥 寛栗 著

仏教音楽への招待

本願寺出版社　1,575円

本書は、『本願寺新報』に連載された、仏教音楽にかかわる60編のコラムをまとめたものである。

本書は3部構成で、第1部「四季いろいろ」では、花まつりや報恩講など仏教行事にゆかりのある仏教音楽が紹介されている。第2部「讃歌のながれ」では、明治初年から今日に至るまでの仏教音楽の様々な系譜を概観できる。第3部「それぞれのご縁」では、仏教音楽というファインダーを通して浮かび上がってくる、意外な音楽関係者や仏教者を紹介している。

「私は仏教讃歌こそ、日本のいのちの歌であってほしいと願っています」という言葉に象徴されるように、本書は全編にわたり、著者の仏教音楽に対する惜しみない愛情に溢れている。

この他、教学伝道研究センターでは、ホームページ内に「仏教書レビュー」のコーナーを開設しております。毎月10日ごろ更新し、4冊ずつ紹介して参ります。

仏教書レビュー　検索

http://crs.hongwanji.or.jp/kyogaku/review/
このページはリンクフリーです。

本願寺界隈（六条堀川周辺）

仏教×散歩

日本に仏教が伝えられて1500年。
その教えは、人々の心に受け継がれ、
さまざまな文化を残してきました。
カメラと地図を片手に歩くと、
ふだん何気なく通り過ぎる路地裏に、
意外な日本仏教の風景が見えてきます。

修復が完成した御影堂

本願寺の寺地

七条堀川の交差点を北に上がると、陽光に照らされた銀色の大屋根が姿をあらわす。10年ぶりにお披露目されたばかりの御影堂だ。

現在の本願寺の姿は約420年前、天正19（1591）年にはじまる。京都の都市整備をすすめていた豊臣秀吉が、ここ六条堀川に寺地を寄進した。南北は、七条通から聞法会館の建つ六条通、東西は新町通から下松原通まで。その大きさは、現在の境内の約3倍に相当する。

小さな葉を風に揺らす大イチョウを眺めながら御影堂門を抜け、往来の激しい堀川通りを渡ると、当時の名残をとどめる門前町が広がっている。銘菓「松風」で知られる「亀屋陸奥」、お香を扱う「負野薫玉堂」といった老舗とともに、カフェ「ICHOYA」など新しい店も建ち並ぶ。

浄土教ゆかりの地

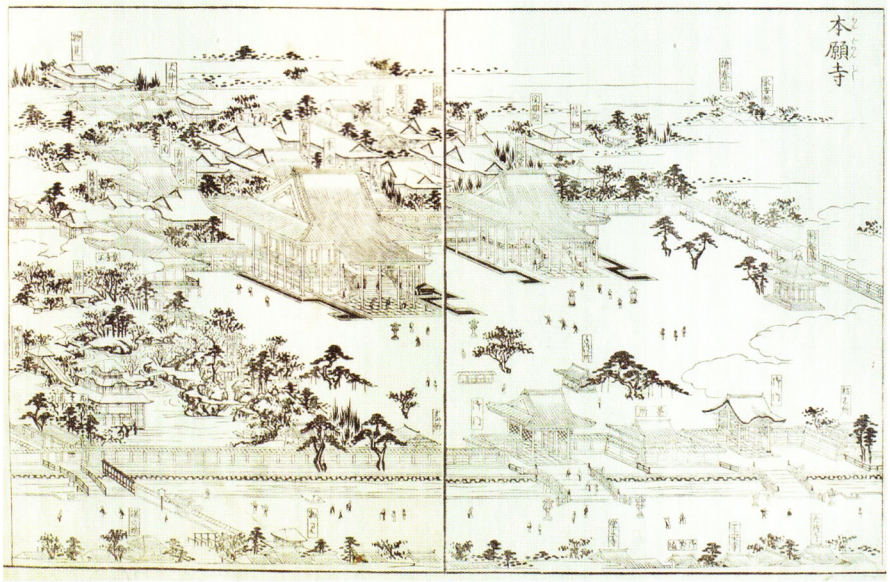
なぜこの地が選ばれたのか。大阪へと繋がる要所であった京都南端部に本願寺を置き、応仁・文明の乱によって荒廃した京の都市復興を担わせた、という説が有力である。しかしそうした移転の理由とは別に、この地が浄土教の歴史と深い関係にあったことにも注目したい。

平安時代、京の町に「市の聖」とよばれる僧が現れた。空也上人である。空也が拠点とした「市」こそが、現在の本願寺・興正寺一帯に広がり、平安京の人々の暮らしを支えた官営市場「東市」だ。店々で托鉢し、病者に施しをした空也は、今は龍谷大学大宮キャンパスのある七条猪熊の市門に一基の卒塔婆を建立し、「一たびも南無阿弥陀仏という人の、蓮のうえにのぼらぬはなし」と刻んで、極楽往生の念仏を勧めた、と伝記は伝えている。

踊り念仏

空也上人が没してから約300年後の鎌倉時代、一人の念仏者が再びこの地を訪れている。弘安7（1284）年、およそ10年の遊行の旅を経て京に入った一遍上人だ。「空也上人はわが先達なり」と語る一遍は、六波羅蜜寺などを巡拝した後、市屋道場（金光寺）に入った。高床式の踊り屋を舞台にして、あふれ出す念仏のよろこびを身体に

「ICHOYA」一番人気の「湯葉納豆丼」。湯葉と納豆が絶妙。「大峯顕先生（元浄土真宗教学研究所長）がアイディアを出されたんですよ」と店主の伊藤さん。地図①
http://www.ichoya.jp/

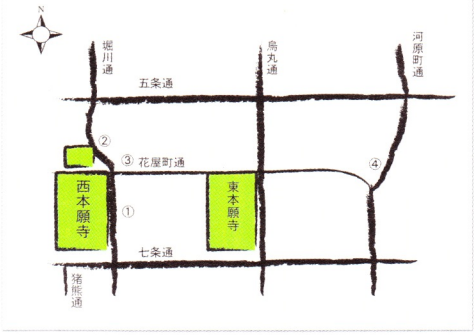


『都名所図絵』（国際日本文化研究センター蔵）が伝える江戸時代の本願寺境内。

「レストランむとう」のランチメニュー「若鶏もも肉のコンフィ マスタードソース」。彩りも美しい。地図③
http://www.r-muto.jp/

堀川通に面する佐女牛井跡 地図②

現在は京都市下京区本塩竈町に移転した金光寺。地図④



あらわす「踊り念仏」の姿は、『一遍聖絵』のなかでも最も有名なシーンの一つである。この地が現在の本願寺界隈に相当することは、なんとも不思議な偶然といえよう。

市屋道場のゆくえ

本願寺の移転にともない、市屋道場は鴨川の西畔に移った。太鼓楼の面する花屋町通を、まっすぐ東に歩いてみよう。東本願寺を越え河原町通の手前、閑静な路地にたたずむお寺がある。現在の金光寺（時宗市屋派）だ。ぜひ足を延ばしてみたい。

佐女牛井の名水

本願寺の北には、名水で知られ、足利義政や千利休も愛用した「佐女牛井（さめがい）」があった。現在は、聞法会館の北側にひっそりと石碑が残るのみだが、その水は、堀川通りを挟んで向かい側のレストラン「むとう」に、昔と変わらず湧き出ている。

平安京の時代からお念仏とご縁の深い六条堀川周辺。お念仏の真髄を明らかにされた親鸞聖人の遺徳を偲びつつ、歴史の重層性に思いを馳せたい。

野呂 靖（教学伝道研究センター 研究員）

【参考文献】
今井雅晴編『遊行の捨聖 一遍』（吉川弘文館、二〇〇四）
河村能夫編著『京都の門前町と地域自立』（晃洋書房、二〇〇七）
石井義長『空也』（ミネルヴァ書房、二〇〇九）

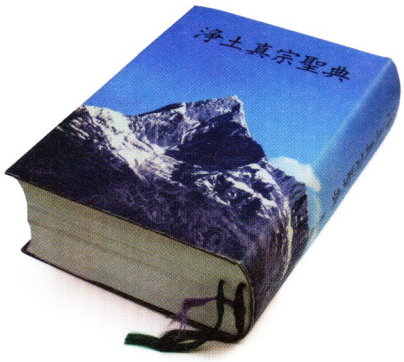
教学伝道研究所では今冬、**「真宗の土徳～地域に薫る念仏」**と題して、御影堂平成大修復の詳細や門前町の文化をはじめ、全国に息づく真宗文化に関するシンポジウムを開催します。多数のご来場をお待ちしております。

【日時】二〇〇九年一二月一五日（火）一三時～
【場所】本願寺聞法会館三階多目的ホール

※詳しくは近日中にアップされます教学伝道研究センターHPをご覧ください。

聖典こぼれ話

『註釈版聖典（第二版）』ってどんな聖典？



◎はじめに

『註釈版聖典』は、仏教婦人会など各種研修会に広く活用されることを目的として編纂され、宗門の内外から高い評価を得て普及しています。昭和63年に初版が発刊されてから20年以上が経ち、発行部数も14万部を超えるベストセラーとなっています。今では、スタンダードな聖典として研修会や学習会の折りに自発的に持参してもらえるようになりました。

◎『第二版』の特徴とは？

ところで、このように身近な聖典となった『註釈版聖典』ですが、これに緑色表紙でお馴染みの「初版」と、平成16年に改訂された青色表紙の「第二版」の2種類があることをご存知でしょうか？

「初版」に比べ、「第二版」は最新の研究成果を元に、より充実した内容となっています。その特徴は大きく3つあります。

1、難しい用語を解説した語註や年表、そして聖蹟地図などが収められている「付録」が大幅にバージョンアップされています。

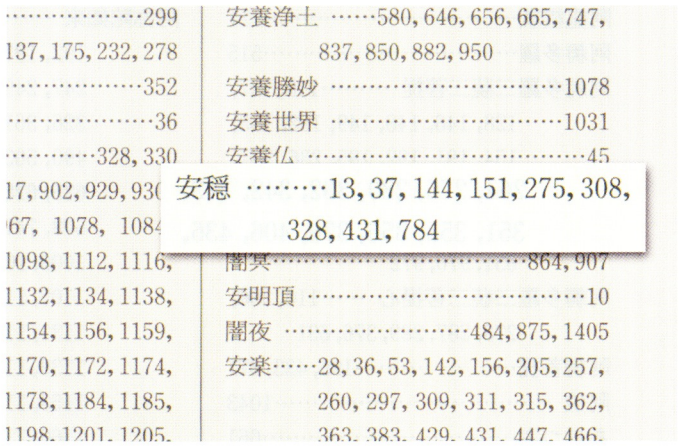
2、新たな試みとして『註釈版聖典（七祖篇）』との「連絡ページ」が盛り込まれています。

3、聖典に出ている文言が検索できる「索引」が設けられました。

今回は、その中でも、第二版の大きな目玉である「索引」について、ご紹介したいと思います。

◎「索引」が出来上がるまで

「索引」を作成するためには、聖典に出ている言葉をすべて拾い上げなければなりません。その量は「12万語」という膨大な数に達していました。それを索引という形に整えてゆくのは、決して順風満帆ではありませんでした。何度も何度も検討を重ねる必要があり、コンピュータを駆使して24時間稼働させて作業を行うこともありました。そして、12万語もの候補から、1万1千語の用語が厳選され、収録されました。



◎「安穏」を調べてみましょう！

それでは、この「索引」を実際に使ってみましょう。

例えば、親鸞聖人七五〇回大遠忌のスローガン「世の中 安穏なれ」は、どこに載っているでしょう。

早速調べてみますと、『註釈版聖典（第二版）』をご覧下さい！（お手許にない方はこの機会に是非お求めを。分冊版もあります）

このご文の「安穏」を「索引」で引いてみると…後ろから4ページの右段中央にありますね。「13」から「784」まで9つのページ数が挙げられていますが、これを順番に見てゆくと「世の中 安穏なれ」というご文は、784ページにあることがわかります。これは『親鸞聖人御消息』二十五通目にあるお手紙のなかの言葉で、「御報恩のために御念仏こころにいれて申して、世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」という一文のなかの一節であることがわかります。

このように知りたい用語がどこに、どのようにして使われているのかということを、簡単に調べることができます。この他にも、法話のご讃題さがしの一助にもなりますね。

◎こぼれ話

最後にこんな話をひとつ。この索引の編纂過程でわかったことですが、一般に「百八」あるといわれる「煩悩」という言葉が出ているページの数を調べたところ、奇遇にも108箇所あったのです。また、大乗の菩薩が修めなければならない六種の行業「六波羅蜜」は、6箇所みつかりました。登場回数がそれぞれの語とシンクロする単位であったことは、なんとも不思議な偶然でありました。

田中 真（教学伝道研究センター 常任研究員）

教学相談メモ.

PAPER
00001

親鸞聖人のご往生が1262年というのは間違いだった!?

ご門主が昨年4月に制定された「浄土真宗の教章(私の歩む道)」では、親鸞聖人のご往生が1263年1月16日(弘長2年11月28日)と表記されています。

「教章」制定以来今に至るまで、こちら「いのちと念仏」相談センターには、この表記に関する質問が数多く寄せられています。中には「今まで〈1262年〉と覚えていたのは間違いだったのですか！」というお叱りの声もありました。

しかし大丈夫です。今まで覚えてきたことが間違いだったというわけではありません。

下の図をごらん下さい。上段が旧暦、下段が西暦(※)で、●は親鸞聖人がご往生された時点を示しています。図に示されているように、旧暦と西暦との間には数十日のズレがありますが、歴史学などでは便宜上、西暦の年と旧暦の年とを同じ年とみなして対応させています。これは、いわば一種の「お約束」です。

そのお約束に沿って、親鸞聖人がご往生した「年」を、旧暦に西暦を並記させて示すと、**弘長2**(1262)**年**等と表記されます。こうした表記の方法によって、従来は、親鸞聖人のご往生は西暦で「1262年」である、と覚えられてきたわけです。

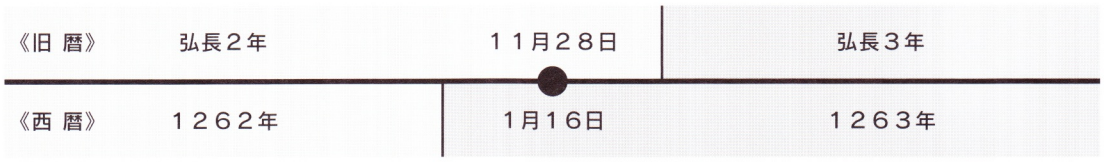
一方、新しい「教章」では、親鸞聖人のご往生の時が、「年」だけでなく「年月日」で表わされています。ここがポイントです。

もう一度、下の図を確認してみましょう。●で示された親鸞聖人のご往生の「年月日」は、旧暦では、**弘長2年11月28日**となり、西暦では、**1263年1月16日**となります。

つまり、日本の京都で親鸞聖人がご往生されたその日「弘長2年11月28日」、西洋では既に「1262年」は去り、「1263年」に突入していたのです。ゆえに、西暦の「年月日」まで示す場合、親鸞聖人のご往生の年は「1263年」となるわけです。

「今までの年号は間違いだったのですか！」とお叱りの声を寄せてくださった方々は、図でいう●の位置自体が変わったのかと驚かれていたようですが、決してそうではないということですね。

なお、現在、宗門の出版物などで親鸞聖人のご往生に関して旧暦と西暦とを並記する場合は、整合性をはかるため、原則として**1263年1月16日**(弘長2年11月28日)または**弘長2年11月28日**(1263年1月16日)と表記することとされています。年号のみで表記する場合もこれに準じます。このことは2007年に各教区教務所へ通知もされておりますので、ご確認ください。



※当時の西暦はユリウス暦でしたが、ここでは便宜上、西暦＝グレゴリオ暦(新暦)としています。また、ユリウス暦でもグレゴリオ暦でも、聖人のご往生の日が1263年に該当するのは同じです。

西 義人(教学伝道研究センター 研究員)

Q 確認クイズ

次の①～③のうち、親鸞聖人のご往生年月日の表記として正しいものはどれでしょう。
①1263年11月28日　②1262年1月16日　③1263年1月16日

答え：③ ／ ①は西暦と旧暦の混同です。これでは親鸞聖人ご往生の約10ヶ月後になってしまいます。②はご往生の1年前です。

論点　おくりびと

新聞情報メールマガジン（※）で見ると、「おくりびと」に関連する記事数が、米国アカデミー賞を受賞した2月は実に50件以上、2月22日の受賞以後も熱は冷めず、3月もやはり50件近くの関連記事が掲載された／その中には「死」の問題を見つめ直す記事も多かった／映画を通して死の問題が、少し身近になったのではないか／映画は、鳥海山と庄内平野を流れる月光川の清澄な風景、チェロの奏でる調べを基調とし、本木雅弘氏演じる新米納棺師の成長の姿が描かれていく／成長していく中で主人公は、納棺師としての技術だけでなく、複雑に絡まり合う生の世界を解きほぐす、「死」からの眼差しを得ていく／死は豊穣な意味を持ち、厳粛であり、そして単なる終わりではない／これも映画の主題の一つだろう／ただ、『納棺夫日記』の作者である青木新門氏は、映画の成功を祝福しつつも、著書を原作とすることを拒まれた／理由は「一番描いてほしかった『おくりびと』が（死者を）どこに送るのか」が描かれていなかったから」／見送る者は、その行き先を案じる／行き先がわかると、別れの悲しさとともに、安心がある／

藤丸 智雄（教学伝道研究センター 常任研究員）

※教学伝道研究センターは「新聞情報メールマガジン」を発行し、新聞（朝日・読売・毎日・産経）に掲載された宗教関連記事の「記事タイトル・記事掲載面・記事のURL・KEYWORD」を、無料（通信費は除く）で僧侶・寺族の方に提供しています。詳細は「宗報」をご確認ください。

研究所刊行物ご案内

「浄土真宗聖典（現代語版）」シリーズ

浄土文類聚鈔 入出二門偈

編纂：本願寺教学伝道研究所

本願寺出版社刊　1,050円

『教行信証』と同じく浄土真宗の要義が示された『浄土文類聚鈔』。他力の深義を明らかにした『入出二門偈』が身近な現代語版になりました。

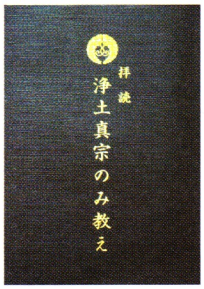
教学シンポジウム　親鸞聖人の世界

念仏の源流

企画・編集：教学伝道研究センター

本願寺出版社刊　840円

末木文美士・国際日本文化研究センター教授による基調講演などを収録。念仏の起源や特徴について、歴史的・思想的に探る。

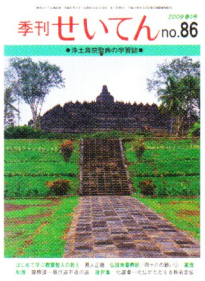


拝読 浄土真宗のみ教え

編集：『拝読 浄土真宗のみ教え』編集委員会

本願寺出版社刊　315円

親鸞聖人七五〇回大遠忌を記念して制作されました。浄土真宗のみ教えを正しく領解し、味わいを深めることのできる言葉が収められています。



浄土真宗聖典の学習誌

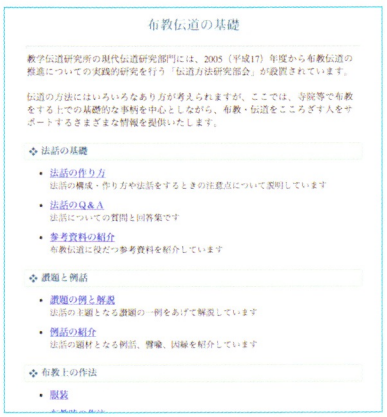
季刊せいてん

編集：教学伝道研究センター

本願寺出版社刊　700円

聖典拝読の手引に、グループ学習のテキストに適した、浄土真宗の教えを読んで味わう学習誌。

研究所のホームページ紹介



突然、法話をする機会ができた！きちんと法話をしたいけど、どうして良いかわからない～！こんな時にはHP「布教伝道の基礎」をご覧ください。基本中の基本〈法話の作り方〉と〈布教上の作法〉、あなたの疑問に答える〈法話のQ&A〉、話材の宝庫〈讃題と例話〉と〈検索「みんなの法話」〉、法話のスパイス〈コラム伝道〉などなど。法話作りに役立つコンテンツが盛りだくさんです。

布教伝道の基礎　検索

http://crs.hongwanji.or.jp/kyogaku/mission/

ことばの小窓

あなかしこ

「あなかしこ」は、『御文章』各条の末尾に用いられていることで、お馴染みのことばです。もともとは、尊いものに対して「ああおそれ多いことよ。もったいないことよ」と「恐れ慎み、恐縮する感情などを、感動的に表す慣用句」（『日本国語大辞典』）ですが、一般には、手紙の最後に用いて、相手に敬意を表すことばとして知られます。

私たち念仏者は、『御文章』を通して阿弥陀さまのお心をお聞かせいただき、結びのことば「あなかしこ　あなかしこ」を通して、改めて、阿弥陀さまに対するお敬いの心持ちと自分自身に対する慚愧の思いをお聞かせていただいてきたのです。

本願寺教学伝道研究所ニュースレター『あなかしこ』創刊号
発行日：2009（平成21年）9月1日
ISSN1884-1120
編　集／本願寺教学伝道研究所
発行者／浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター　所長：浅井成海
制　作／藤原 慈信
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92
TEL：075-371-9244　FAX：075-371-5761